SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.156

1999.7・8・9

■対談
日本の高等教育を考える ／2・3・4・5
■教育プログラム報告
第180回大学共同セミナー ／6
第36回大学教員懇談会 ／6
第１回大学職員研修プログラム ／6
第３回土曜セミナー ／7
第18回大学教員研修プログラム ／7
■法人ニュース
委員会報告 ／8
寄贈図書・寄付 ／8
出版物のお知らせ ／8
ホームページのご案内 ／8
ひとこと ／8
花ごよみ ／8
■私の国際交流 ／9
■わたしたちの合宿 ／10
■利用状況 ／10・11
■主催プログラム開催予定表 ／12
■館長室から ／12

Plain living and high thinking

財団法人　大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
ホームページ　http://www.mesh.ne.jp/iush/

蓮實　重彦（東京大学総長）
佐野　博敏（大学セミナー・ハウス理事長・館長）

対談
（平成11年9月1日）

日本の高等教育を考える

佐野　東京大学は高等教育のピラミッドの頂点にあり、日本の教育の環境破壊にも繋がりがあると言われることもあるようです。そこで、蓮實先生に教育全体の中の高等教育について、あるいは現在国立大学が直面している問題などをお聞かせいただければと思います。

まず、今小学校、中学校、あるいは高等学校で学級崩壊や学校崩壊が起こっていると言われております。そういうものとの繋がりの上に高等教育があるわけですが、今の教育環境というものについていかがお考えでしょうか。

日本の高等教育の問題点

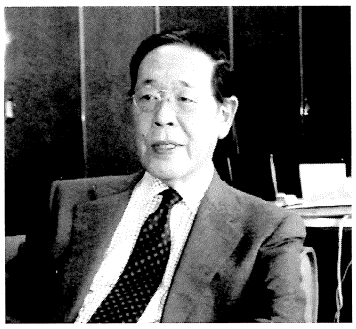
蓮實　私は本来、大学は消えてなくなっても構わないと思っていた人間で、あまりそのようなことを本気で考えたことがありませんでした。これまで大学について、かなり距離をもって見ていただけに、学長の立場に立ってみますと、ことによったら大学について見えていなかったものも見えるような気がいたします。そのような観点で申しますと、今の高等教育には二・三大きな問題があると思います。

問題の第一は、日本には高等教育行政はあっても高等教育政策がないということです。私は先ほどお話に出ました学級崩壊等々も教育行政はあっても教育政策がないところに起因していると思っています。ところが、ある意味では高等教育政策がないというのは非常にいいこともありまして、行政を納得させれば後は大学の自由になってしまう。大学が教育政策なしにやってきたことは、ある時期までは日本の高等教育に役立っていたのだろうと思います。教育政策なしにその都度その都度事態に対応する行政の限界を見ぬいた上で、大学の皆さん方が知的に判断してきたものの方がよく機能するように見えておりました。今、教育行政から教育政策に転換させるべきかどうかという、判断が難しいところで、ある意味では教育政策がないから日本の科学技術および人文科学の政策が力を得ているということはあると思いますね。一方、アメリカは教育政策としてもう物理は21世紀にはいらない、それよりも情報・生命が必要だと言っているわけです。つまり、アメリカの政策では例えば物理のような巨大科学にはもうお金をつけない、その代わり生命・情報には付けていきましょうということになっていますし、アメリカの小さい大学では天文学なんかはいらないという話にどんどんなっています。日本はまだ物理のような巨大科学にも、高エネ研のようなものにもお金を付けるという段階で、それは政策なしの日本の良さだと思うのです。ただし、本当にこれからもそのままでいいかどうかは分かりません。先ほどご指摘になられたような問題は、高等教育行政と高等教育政策の矛盾がそろそろ出始めたからかもしれない。しかし、政策を立てられると、アメリカのようになってしまいかねないという気持ちもしております。

高等教育に関する第二の問題点は、研究に対する異常なコンプレックスが皆さんにあるということです。三流の研究者の方が一流の教育者よりもいいということで、なぜか研究者と言われると持ち上げられ、教育者と言われると軽蔑されたように思われる。これは全く間違いで、勿論研究は絶対に必要ですが、やはり教育の部分をもう少し日本は考えないといけないと思うのです。アメリカの教育センターの出したパンフレットなどを見ますと、大学の先生に自分の声が教室の一番後ろまで通るかどうかを必ず確かめよとか、自分の書いた黒板の字は自分で後ろまで行って見えるかどうか確認せよといったごく初歩的なことまで言っているのです。人間的なモラルの部分は当然ですが、日本の大学にはテクノロジーの部分ももう少し必要だと考えます。

第三点は、世の中は流れで動きますけれども、大学は流れではなく知性で動かなければいけない。この場合の知性というのは、流れの中で無視されているものもう一度掬い上げ、全ての中から可能性のある考えをいくつか選び、その中から取るべき考えや立場を明らかにしていくことです。ここで先ほど先生が仰いました独立行政法人の話になるわけです。まずそういう場合に何が問題かということを考え、その上でその問題を解決するためにはどうすればいいかを考えなければならない。はたして国立大学のままでいるのが良いのか、それとも独立行政法人になるのが良いのか、それぞれの良さについて検討しなければいけない。ところが、今はその検討が殆どなされずに、独立行政法人になるとしたらという前提の話しかしていないと思います。それは大学のとるべき立場ではないので、やはり東大が私立になった場合にはどのような事態が日本に起こるか、また東大に何が起こるのかということを考えなければなりません。ごく単純に計算致しましても、今の規模のもとで東大が私立になった場合にはほぼ250万の月謝が必要になります。その250万の月謝というのはプリンストンのようなアメリカの一流大学とほぼ同じです。これは日本では無理でしょうが、もしそれを無理にやった場合には、公立の大学や私立の大学に大きな影響を及ぼして、多分私立のうちいくつかは潰れる可能性があります。それを考えた上で私立になることは除外しておく。では独立行政法人はどう

▶東京大学赤門



▲蓮實　重彦氏

▲佐野　博敏氏

か、あるいは国立大学のまま残るのはどうかというふうに考えなければいけないところを、どうも、大学のことを決めるのに大学にふさわしい知性が見失われている。以上、三点が今の高等教育についての重要な問題ではないかと考えております。

佐野　先ほど先生が、これまでは教育政策がないことで却って長所も発揮できたと仰いましたが、本来国がやるべきかも知れないけれど、ある程度大学が高等教育の政策をやっていたということでしょうね。

蓮實　これは言わば、大学の中で自然発生的に今まで存在しているディシプリンをより良くしようという善意に基づいて出てきたのだと思うのです。ですから、その大学の中にいらない学問分野があるのではないかという方向の考え方は出てこない。どれもこれも必要だという形になりましたので、結局のところ、大学の中がある意味の拡張政策ということになってしまい、逆に今度は全てが有効に機能しなくなってしまったということなのではないかと思います。

佐野　あるところで限界を越えてきたのと同時に、外部の要因としてわが国の経済情勢も右肩上がりが続かなくなった。そこである程度合理化を考えざるを得なくなってきたわけですね。その第一段階として、東大では教養学部、他の大学では教養について合理化できるのではないかという流れがでてきたわけですね。その結果、行き過ぎがあったという反省も出ているようですが、高等教育におけるリベラルアーツの問題についてはいかがお考えでしょうか。

スキルを欠いた改革の流れ

蓮實　先頃、大学の設置基準が変りました。設置基準が変れば自由になったというふうに大学は思うべきであったのに、逆に設置基準の変更がある一定の流れを作ってしまいました。その流れの中で大学はそれぞれリベラルアーツの必要性を充分検討することもなく制度的に変えてしまいました。あれは流れに身を任せた、それこそ知性を欠いた改革でした。もう少し時間とエネルギーと余裕があればああいうことにならなかっただろうと思います。これもはっきり高等教育行政の失敗だと思いますけれども、行政側は時間がないと言って急がせるわけです。それに対して、急ぐ必要はない筈なのに、行政の言う通りにしておいた方が概算要求の際に有利であるなどという色々な思惑から、ついその流れに大学は乗ってしまった。あれは高等教育行政の汚点の一つだと私は思っています。

佐野　同じように、今回の独立行政法人化の問題も行政的に合理的ないき方ということで急がされているのではないかと思います。教養の廃止と類似性があるのではないかという気が致します。

蓮實　仰るとおりです。あの時と同じ現象が起こったら文部行政はこれで破綻するだろうと文部省の人も言っております。残念ながらやはり流れが急で、その中で検討すべきもののいくつかが脇に置かれている状況です。もちろん、大学であろうと国の財政のことに関して全く協力しないという立場はありえないので、何らかの協力はしなければいけません。しかし、それにはどうすればいいかということを考える際、私は独立行政法人化が不可避であるというような流れだけで話が進んでいくことには大きな疑念を持っております。私は大学が法人格を持つことに関しては全く反対しておりません。それについて東大は前から検討を進めておりましたが、独立行政法人化のスキルを読んでみますと、それを大学に当て嵌めるためにはかなり抜本的な変更を加えなければならないと感じます。スキルが何かということを一つ一つ考えていかないと、21世紀の大学は非常に不幸なことになるだろうと思っておりますので、今それをいろいろな方と考えているところです。

大学に求められるプロモーション活動

佐野　よく、教育は木を育てるのと同じで、非常に忍耐が必要だと言われます。その喩えで言えば、自然に芽が出てくるところを急ぎすぎて、芽を引っ張ったり花をむりに開かせたりというような手の加え方をしているように感じます。しかし、大学自身が内部に対してもここまで改革を進めている、検討を進めているという姿勢を見せなければ、世の中に対する説得性はなかなか得られないのではないかという気が致します。

蓮實　それは仰る通りだと思います。その時に何をすることが人々に対し、改革していると説得的であるかということですね。人々になるほど大学もいろいろやっていると思ってもらうためには、我々が何を示せばいいかということです。これまで大学はそういう点に関して積極的ではなく、いい研究さえしていればいつかは認められるというふうに思っていたのですが、今は日本の大学はある程度世界の一流の水準というところまできております。その中で戦いをする際は黙っていたのではだめで、どうしてもいろいろなプロモーションが必要になってきます。私はそのプロモーションの部分をどうするのかということをこれまでやってきた人間です。やはり大学にはプロモーションが必要で、プロモーションのためにはどうしてもプロデューサーが必要です。今まで大学のプロデューサーというのは文部省でした。ところが文部省にはプロデューサーとしての才能がないというのはほぼ分かってきておりますので、これからは大学自身がやっていかなければならないということで、私たちも随分いろいろとやっております。ただ問題は、日本のマスメディアでは自国の何かが優れているということは絶対ニュースにならず、それがニュースになるのは野茂が17勝したことなど外国に行って何かをした時だけです。これは映画でもそうで、どんなに日本の映画が優れていると言ってもマスメディアは取り上げず、ベネチアで賞を取ると初めてニュースになるのです。ですから、私たちは考えを変えて、日本の中ではなく外国でプロモーションをしていかなければならないと思います。日本では社会部の記者にどれほど言っても全く耳を貸してくれません。彼らが耳を貸してくれるのは先生がスキャンダルを起こした時と入試の失敗の時だけでしょうね。やはり、もう少し外国で名前を上げなければいけないと思います。私の雑駁な計算ですが、25%の先生方はもう外国で充分やっていらっしゃると思うのです。今私たちはその情報を日本に逆輸入する以外にないのではないかということでそれに力を入れてやっているところです。一番いい外国の賞はノーベル賞でしょうが、ノーベル賞は大した賞ではないと皆さん仰り、事実今はその通りになっていると思いますが、大した賞でなければ貰わないより貰った方がいいだろうと思います。貰うためにはやはり方法が必要です。例えば日本に、物理学賞を貰うために推薦状を出す先生方がおられますが、何人の先生のもとに推薦状を出せというお誘いが来たかを把握している所が日本のどこにもないのです。そうしますと、先生方はお互いに勝手な名前を書かれますから絶対に纏まらない。それを少し纏めれば、例えば物理学賞は今最低貰われておかしくない方は4人か5人いらっしゃると思いますし、ことによるともう少し増えてくるかも知れない。それを文系の私がやるのは変なことなの

ですが、やはりそういうこともやってかなければいけないと思っております。プロデュースをすれば、恐らく一番効果的な日本国内のプロパガンダになるだろうと思います。

佐野　先ほど仰った、マスメディアがなかなか取り上げてくれないということは、日本の文化の中にまだ後進性が多分に残っているということでしょうか。

蓮實　そうですね。それから恐らくマスメディアは日本の官僚制度以上に官僚的でして、縦割りになっております。大学の所にやってくるのは全部社会部の記者です。社会部の記者は社会部的な視点しか持っておりませんから、事態を判断しその中で何かを自分なりにニュースに組み立てていこうというよりは、自分の持っているストーリーに合えばこの事件は取り上げようということになります。そういうところから出ておりませんので、民間部分にある官僚制を今後どう打破していくかということが、日本の活力を生み出す上で必要なことだと思っております。

教育機関としての大学のあり方

佐野　今までの殻を破っていくという意欲を持った学生を育てることができるかどうか、社会に出て行く学生への大学における教育という点ではどうでしょうか。

蓮實　大学にも限界がありまして、例えば工学部など、あれだけ大きい組織でありながら機能しているのは、殆ど機能の主体は組織なのです。組織ですと、そこには偉い教授がいて助教授がいるというとどうしてもその縦の線の中でものを考えてしまいがちで、横の別の組織では自分と同じ水準にいる人たちが何をしているか、あるいは別のディシプリンでは何をしているかというのに対する興味が非常に落ちてくる。それが限界の先ず一点です。

もう一つ、日本ほど若い時期に自分の職業およびその職業のもとになる専門を選択する国はないのです。ですから、大学が手をつけられないうちに彼らは大学から出ていってしまいます。現在就職は殆ど21歳で決まっており、自分の将来の職業に対するイメージもないまま進んでしまうわけです。せめて23、24歳まで繋ぎ止めているのであれば今後の社会における働きぶりに大学がある種の関与をすることができると思いますが、21歳でいなくなってしまう人たち、例えば21歳で自分は法律の専門家だと信じて官僚になってしまうような人たちには私どもは責任が持てません。

佐野　今、国際化が必要だと言われていますが、国の外との関係ではなくて、日本の中で、隣のセクションとの国際化の訓練がされていない。今仰ったある組織と隣の組織との間の国際化がされていないということですね。

蓮實　はい。今、それを何とか打ち破ろうとしています。私は大学院に研究科以外のものを作ることができるという法律改正を、良い方に持っていこうと考え、来年度から研究環というものを発足させようと考えています。生命科学や情報科学、あるいは環境科学といった21世紀に必要なものはどうしても縦の組織ではうまく機能しません。さし当たって来年度は情報に関する、自分の所属以外の先生にも付くことができるという研究環を準備中です。情報という分野は確かにコンピュータサイエンスの専門家はいますが、その専門家だけでは情報全てをカバーできません。環としての情報科学というものをめざすつもりです。今後、大学の中にさまざまな横断的な環を作っていきたいと思っております。

佐野　大学と大学の間はいかがでしょうか。

蓮實　これまでは、外国の大学との間の方がやりいいところがありました。しかし、そんなことはないはずだということで、既に東大でいくつかの大学と単位の互換を始めておりますし、もっとこれは盛んになっていかなければいけないと思っております。

もう一点、例えばある私立大学の中に短大と四年制の大学があった場合に、短大はやはり下であるという意識があって四年制の大学の先生方は短大の学生をすぐには受入れない。今後そんなことを言っていると学生がいなくなってしまいますよというような事態を前にしていながら、至るところでそのようなあまり生産的とは思われない差別意識が働いておりますので、まずそれをとっぱらわなければなりません。幸い東大は私立より決断が早いのですね。お話によりますと、例えば、大きな私立大学の学長などは教授会が反対して何もできないと言われ、それなりのエネルギーと時間をかけていらっしゃるようです。いま東大には、それぞれの部局の代表と女性研究者代表というような形で総長補佐が14名いて毎週月曜日に集まって2時間話し合いをしております。それに費やすエネルギーは大きいのですが、それによって予め意見の調整ができますので、評議会で決断が2週間遅れ、3週間遅れというようなことはありません。

佐野　国・公・私立の大学間交流は大学セミナー・ハウスが設立以来めざしてきたことですが、最初の頃と較べ近頃はやはり先ほどのお話のように一つのグループの中に閉じこもり、外とはあまり接触をしないで済ませるという気風が段々強くなってきているようです。学生はまず大学に入る時に層で輪切りにされ、そして自分が入ったところの学部や学科やあるいは大学の外にあまり出ない。縦も横も切られてしまって、一つのセルの中から外に出ないで済んでいる世の中だからそうなのかも知れないのですが、その活性化はどういうところに求めればいいのか。これはもう大学の中だけではなく教育全体でどう探っていくべきかという問題ではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

蓮實　これという解決策はないのですが、今ジュニアーイヤーアブロードというものがかなり盛んになっております。単位互換をし、外国の学生を日本に一年間滞在させて、英語の授業をしております。これがかなりいい影響を与えております。東大の教養学部の学部課程に絶えず20数人の外国人学生を受入れ、それと同数の学生を外国に出しております。今後はもう少し増やしていきたいと思っています。そのためにはやはりそれなりの先生を文部省が保障してくれないといけません。英語による授業というのは非常にエネルギーを必要としますし、単に知識をお持ちの先生だけでもいけないある種の特技ですので。

それから、東アジア研究型大学協会というのあります。香港科技大学、浦項工科大学校、北京大学、上海の復旦大学等々全部で16校が加盟し、今年は香港と北京の精華大学で学生キャンプをしました。来年は東大ですることになると思います。これは送り出すのはほんの10人ほどの数ですが、帰ってくると明らかに学生が変ってくるのです。彼らはアジア人ともコミュニケーションの手段は結局英語しかないということを必ず自覚致しますし、先ず自分の国の歴史を知らないとばかにされるということが分かります。数の上では少ないのですが、なるべくそういうものの数を増やしていこうと思っています。いくら教師が口を酸っぱくして日本の事を知らないとばかにされるぞと言っても実際にばかにされてみないと分からないもので、そのかわり一度外に出てばかにされるともう本気でやるようになります。

佐野　私は今大妻女子大学で授業を持っておりますが、そこからアメリカの大学に行った学生と文通をしているのですが、自分は大妻にいたときには授業では一言も質問をしないでいた、しかし、向こうでそうでない学生の中にいると何で自分は今まで質問一つしなかったんだろうと思えるくらいそれが自然にできるらしいのです。その文化が50％近くになってそういう雰囲気になってくれれば日本人でもちゃんとそうなるんですね。今多少始められているということですが、あるところの臨界点、クリティカルなところまで数が増えないとなかなかそれが難しいのかも知れませんね。

蓮實　仰るとおりだと思います。

佐野　私どもの大学セミナー・ハウスの主催しております大学共同セミナーや大学院共同セミナーなどに参加した学生はそこで初めて他の大学の学生と接触をし、ちょうど外国に初めて行って恥をかいたように、自分は今まで大学や大学生はこんなものだというふうに思っていたのがそれだけではないという発見をするようなことがあるようです。ですから、外国との交流以外にも日本の中でも相当そういう交流をすれば活性化が進むのではないかという気もいたし

ます。

蓮實　是非そちらの方で力を発揮していただきたいと思います。

独立行政法人化の課題

佐野　ところで話を元に戻しますが、国大協ではいろいろ検討されていると思いますが、独立行政法人化の先行きはどうなるのでしょうか。

蓮實　一時は本当に流れだけでいっておりましたけれども、最近どうやら私どもの努力もあってか、新聞論調が若干変わって参りました。今の独立行政法人だけではやはりだめだろうというのがごく自然に新聞記者たちの筆にも上るようになりましたが、それ以外の何が提案されているわけのものでもありませんので、一応今週中ぐらいに国大協で考えている今後の対応の仕方を明らかにし、文部省とつき合わせをし、事と次第によっては政治家とも意見を交わして、流れだけでものを決めることがどれほど危険かということを、じっくり時間をかけて周りに示していきたいと思っております。

佐野　そこで二、三具体的な事柄につきお話しいただきたいと思います。教員の任期制とか外部評価といったことがどうしても絡んでくると思うのですが、任期制につきましても、先ほど先生が仰ったように研究面での業績評価は易しいのですが、教育面での評価を東大ではどんな風にされているのでしょうか。

蓮實　これは非常に難しいところで、学生たちは一応ほとんどの先生について採点しております。学生たちの評価を参考に、評価というよりは教育面の充実を図るために、しかるべき先生の授業は誰が見てもいい、授業に来て見てくれてかまいませんというものを幾つか作ろうというふうに考えております。まさに教育というものは質です。実は研究に関しても質なのですが、今のところはそれをかろうじて量でカバーしているわけですね。しかし、本当はやはり教育と同じように研究も質なので、量だけたくさん書いても仕方がないわけです。研究および教育の評価にはインパクトとかアトラクティブな新しい概念が必要だろうと思います。それが本当に研究や教育の評価の役にたつかどうかは分かりませんが、幸いなことに日本は評価に関しては後進国ですから、その利点は活かすべきだということを私は今大学評価の会議では言っております。アメリカはいろいろとつまらないことをやって失敗しています。ところがどうも流れからいくとアメリカのとおりに作ろうというふうになってしまいますので、何が失敗であり、何が成功であり、何がその限界であるかということを見ながらやっていくことが必要なのではないかと思いますね。

佐野　私は前に都立大学におりましたが、ある先生が都立大学に来られるまでちょっと時間があいてしまったのでピンチヒッターで私ともう一人が代わる代わる授業の担当をすることになりました。連絡を良くするために、私の授業を次の時間にやってくださる先生が見ていらっしゃる。そうしますと、正直、あまり変な授業ができません。相手の先生も多分そうだったと思います。今、初等中等教育ではチームティーチングという形で他の先生と共同で授業をするということがあります。大学でもそういうふうなことをすることで、ある程度の活性化ができるのではないかという気が私はしております。また、非常勤講師である大学の先生が他所の大学に行かれると、これは集中講義のせいもあるかも知れませんが、非常に生き生きとお話しをされる。自分の大学ではそうはいかない。これはファカルティーディベロップメントに相当するのですが、その辺の所で何か一つ方法を考えられるのではないかという気がしております。

蓮實　それは、もう先生が仰るとおりですね。つまり今は制度を変えないと良くならないだろうという非常に大きなペシミズムの中で動いておりますけれども、変えなくても大学は圧倒的に良くなるわけですね。特に教育の質と先生方が学生を引き付ける能力についてです。これは決しておべっかを使うなどということではなく、学生はそこのところは非常に良く見ておりますので、おべっかを使う先生は決して高い評価を得ておりません。やはり学生の声をもう少し聞きつつ同僚の先生方の声を入れる。私は教育に関して評価があるとしたら、Aか何もついていないか、それだけで良いと思います。この先生はAだからこの先生を採ると絶対学校としてお得ですよみたいな印と、それからこの先生は別にAではない、悪くはないけれども必ずしも教育面ですごく貢献なさるとは思えませんとか、何か符丁があればいい。それをＡＢＣＤＥなんてやってしまうともう駄目だと思いますので、「この先生はAだ」と、例外的にそういう先生方を作っていって今後先生方が動かれる時にああこの先生はやはり教育もすごいんだなというようなそういう印がいい。その印については、何となく私に聞こえてくることで付けられるような気もするのですけれど。

佐野　あと、もし独立行政法人になってしまったなら、その教員の、あるいは教官の異動がスムーズにいくのでしょうか。同じ国立大学同士であればこれは配置転換だけの話でやりやすいのですが。

蓮實　その辺りは法律的な問題もあり、それを今詰めているところです。ただ、委員の先生方とお話ししていて、モビリティーというものは、それ自体として決定的に良いものではないということを認めようではないか。ある先生がある大学に長くいらっしゃるということが悪であるというような考え方が何となく最近出てきておりますが、長くいることはそのこととして非常に良いことであると先ず認めよう。その上で、若いうちに、可能性のあるうちに動き、その可能性をどこかで非常に高く評価されたならば、その後は動いても仕様がないと思うのです。モビリティ、モビリティと言って永遠に動きつづけることが何か生産的だというようなそんな風潮になってきておりますので、動くことが何をもたらし、それからどのような条件で動くことが大きなプラスをもたらすかということをよく考えないといけない。アメリカでもテニアーになった先生は動きませんから。

佐野　動くというその制度が先にあるのではないということですね。

蓮實　そういうことだと思います。それから、学生を引き付けることができるということで、変わられる先生がアメリカにおられますね。しかし、それがうまくいっているかというとどうも必ずしもそうではないということもあります。

佐野　もう一つ、最後にお聞きしたいのですが、先ほど日本にいいところがあってもなかなかそれは取り上げられないという話がありましたけれども、私が外国の学者から日本の大学の先生はうらやましいと言われたことの一つに、卒業しても先生の所に訪ねて来る学生がいるということです。これは外国では非常に珍しい。例外的に訪ねて来るのはいるでしょうが、ほとんどはあるものを手に入れたらもうそれはそれでおしまいです。日本の学生は外国の教授についてもずっと接触をしてくれる。日本ではお正月に先生のところに年始に行ったりもする。これは得がたいことだから日本の大学はこれを大事にしたらどうかというふうなことを言われたことがあります。これも一つの文化かなという気が致しますけれども。

蓮實　確かに、アメリカの場合は研究者になってしまうとボスとその下にいる人という感じで非常に近くなりますけれども、学部段階からはありませんね。それがまた甘えの風土を誇張しない限りにおいては私は残すべきだと思いますね。

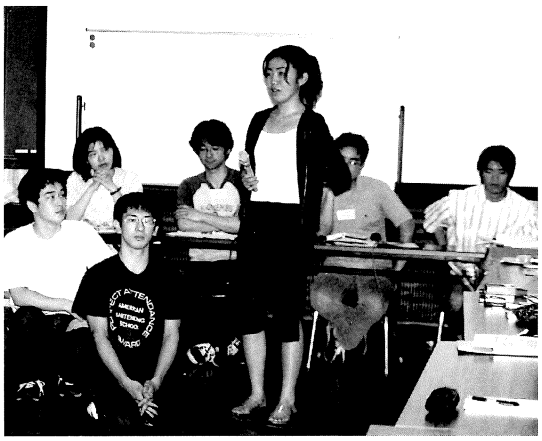
佐野　良い所を残しながら改善していかなければならないから大変だろうと思います。大学の先生も初等、中等教育の先生方も大部分の先生方は教育というのはしがいのある仕事だと一生懸命やっていらっしゃるのですが、いろいろなところからの教育界バッシングで自信を失われているところがあるのではないかという気も致します。是非反対すべきところは反対しなければならないと思いますし、先ほども仰ったように日本の教育政策というものがなければ、やはり教育界に身を置く人間たちがやらなければならないわけでございますね。

蓮實　そういう意味では、学術会議というのがありましても、高等教育の会議というのは日本的な組織にはないわけですね。ですから、私は高等教育評議会とか、そのようなものが文部省と独立した形であるべきだと思います。それを言いますと文部省は嫌な顔をします。しかし、私は高等教育評議会というものにどういう方がお入りになるのかでいろいろ問題があるかとは思いますが、そういうものが必要な時期になってきていると思います。

佐野　今日はお忙しい中、お時間をお取りいただき大変ありがとうございました（終了）

第180回大学共同セミナー
現代社会と人間存在
―変容する世界と人間―

'99年7月2～4日


第180回大学共同セミナーで分科会報告をされる参加者の皆さん

【テーマと講師】
1. 現代における〈共同性〉はどのようにして可能か
　共立女子大学　教授見田宗介
2. 言語以前のからだと言語に組み込まれたからだ(青年と他者)
　演出家　竹内敏晴
3. 子どものからだの現在と未来
　賢治の学校　鳥山敏子
4. 心の「病」と「癒し」と―臨床心理学の現場から―
　日本女子大学助教授　井上信子
5. 「母への依存」のあと―臨床社会学の視点から―
　江戸川大学講師　平山満紀
6. 魂にふれる福祉へ―社会福祉の現場から―
　横浜市立大学教授　加藤彰彦

【参加状況】73名（男30名・女43名）
日本女子（17）、法政（7）、立教（3）、青山学院・江戸川・明治（2）、千葉・東京工業・群馬・横浜市立・跡見学園女子・文教・慶應義塾・國學院・聖心女子・津田塾・帝京・東京薬科・東邦・武蔵・明治学院・早稲田・自由学園（1）、社会人（23）

第36回大学教員懇談会
入りやすく、出にくい大学？
―大学審答申への対応―

'99年7月10～11日

【テーマと講師】
1. 大学審議会答申をめぐって―とくに教育研究システムの柔軟構造化について―
　立命館大学教授　理事　大南正瑛
2. 大学文化の変容と教員評価
　国際基督教大学学長　絹川正吉
3. これからの大学はどうなるか
　東京大学教授　黒田玲子
4. 「教養学部一九九四年度前期（国際文化論）」の悲惨
　早稲田大学教授　平野健一郎

【参加状況】50校・81名(男69名・女12名)
東海（7）、大妻女子・北陸（4）、山形・東京電機・東京薬科（3）、小樽商科・電気通信・山梨医科・岡山・鹿児島・東北工業・聖徳・専修・東京理科・武蔵工業・新潟経営（2）、群馬・千葉・お茶の水女子・東京商船・宮城・宮崎公立・名古屋市立・北星学園・足利工業・明海・東京歯科・青山学院・工学院・国際基督教・駒澤・創価・大東文化・多摩美術・日本女子・武蔵・早稲田・立正・神奈川・フェリス女学院・敬和学園・愛知みずほ・大阪商業・神戸女学院・天理・ノートルダム清心女子・福岡工業・駒澤短期（1）・防衛大学校（3）

第1回大学職員研修プログラム
国・公・私立の殻を破って話し合おう
―これからの大学をどう支えるか―

'99年7月14～15日

【テーマと講師】
1. 大学改革の動向
　国立学校財務センター所長　大崎　仁
2. 変革期の大学運営はどうあるべきか―職員の役割の重要性と組織活性化、SDを考える―
　芝浦工業大学常務理事　小日向　允
3. 企業の求める人材―学校名不問採用の経験から―
　ソニーサービス株式会社社長　桐原保法

【参加状況】59校・87名(男74名・女13名)
芝浦工業(4)、千葉・金沢・山口県立・女子栄養・大妻女子・国際基督教・聖心女子・東海・東京薬科・東京理科・関東学院・名城・皇学館・京都産業・大阪国際・摂南・甲南・兵庫医科・くらしき作陽・ノートルダム清心女子・広島工業(2)、筑波・電気通信・高知・弘前・高崎経済・大阪市立・熊本県立・千歳科学技術・東北芸術工科・奥羽・聖学院・江戸川・東京国際・北里・慶應義塾・恵泉女学園・上智・玉川・中央・津田塾・日本女子・日本体育・武蔵・武蔵工業・明治・立教・洗足学園・岐阜経済・中部・鈴鹿国際・大阪工業・大阪歯科・関西福祉・天理・高野山・神戸学院・九州ルーテル学院(1)、その他(4)

寄稿
第1回大学職員研修プログラム（報告）
慶應義塾大学　湘南藤沢キャンパス学事担当　伊庭　雅人

主旨…全国に多々ある大学は、言うまでもなく設置者・教育の目的・歴史・伝統・研究教育組織・運営組織等が異なっている。ゆえに、個々の大学に関わるすべての人は、それぞれの役割と機能に応じて、必要な知識を修得し、資質と能力向上の努力（スタッフ・ディベロプメント以下SD）を行い展開してきていると思われる。しかしながら、運営やSDには国・公・私立大学共通の課題や問題が少なくないということも否めない。今回のプログラムは、こうした課題や問題についていっさいの枠を取り払い、議論し情報交換をして、大学職員として「いかに大学を支えるか」ということを個々が考える一助とすべく提供されるものである。

開会…大学セミナー・ハウス館長の佐野博敏氏より開会の挨拶があったあと、運営委員の1人である慶應義塾大学入学センター部長の田邊久夫氏より簡単な主旨説明があり、当初講演が予定されていた有馬文部大臣の国会延長による欠席も改めて報告された。また、従来教員研修等を中心に支援してきた大学セミナー・ハウスが、大学職員からの職員研修実施の要望に応えて、今回のプログラムの実現となったとの経緯説明があった。さらには、ほとんどこの種の研修では初めての試みとして、いくつかの大学からは教員もこのプログラムに参加しているとのことであった。

セッション1…講演
「大学改革の動向」

国立学校財務センター所長　大崎　仁氏
要旨…大学を取り巻く状況の変遷について、グラフを基に細かい説明があったが、要は進学率の変化によって明らかなように、大学が戦後エリート型からマス型へ著しく変化してきたということであった。そしてこのことは、計らずも今回のプログラム全体を通しての重要なキー・ワードであったように思われる。そんな中で出された直近の大学審議会答申は、大学の危機意識を背景に研究教育のさらなる質の向上を強く求めているが、実は専門教育をどう見直すかの検討は進んでおらず、

大学生の基礎学力の低下から教養教育の重視にその力点はおかれている。一方、質の問題は、大学院の拡充の方向として打ち出されているが、教養教育を重視するのであればなおさらのこととしてまずは学部を充実させるべきだと考えられる。さらに質の点から言えば、答申が高度専門職業人育成に特化した実践的教育を行う大学院の設置促進として、卒業生の質の確保にまで言及していることが特筆されるかもしれない。

「変革期の大学運営はどうあるべきか―職員の役割の重要性と組織活性化、SDを考える―」

芝浦工業大学常務理事　小日向　充氏

要旨…日本の高等教育の拡大という視点から、再度大学を取り巻く環境の変化について触れられたが、さらに今後はユニバーサル型に大きく移行していくのではないかとの指摘が加わった。ここでいうユニバーサル型とは、一般社会人としての教養や資格を持つ人材の育成、学ぶ意欲を持つ学生の受け入れを柱とした大学の姿だが、大学審議会答申の教養重視や各大学が意欲的なAO入試もその方向性を示している。そんなマス型の成熟期あるいはユニバーサル型への移行期にあって大学の職員像を考える時、教員との協力関係はより不可欠なものとして位置づけられる。それは、教員の持つ学識や見識と職員の持たなければならない企画提案能力の強固な結合を意味し、職員個々は管理運営・経営管理の専門家あるいは大学改革の推進者あるいは戦力スタッフとして、責任感や自負や資質を身につけなければならない。すなわち、法政の「21世紀の法政大学審議会」の教職員一体型プロジェクトに見られるように、ますますの大学職員の研究教育への積極的な関与が望まれるのである。

「企業の求める人材―学校名不問採用の経験から―」

ソニーサービス株式会社社長　桐原保法氏

要旨…70年安保の時代にソニー社長であった盛田昭夫の学歴無用論に端を発する学校名不問採用は、一九九一年実施に移されたが、その目的の一つは一流校からの大量採用からくる権威主義の打破にあった。とは言え、今、当時の面接等の現場を振り返ってみると、結局はだんだんと学校名がわかってきてしまっていたように思われる。したがって、学生側からみるとさしたる変化がないように映ったかもしれない。しかしながら、これによって採用スタッフの力が非常についたことは否めず、実はこの点が学校名不問採用の一番の効果であった。そんな採用形態の中にあって学生に企業が求めたいのは、どのようなキャリアを形成しどう生きていきたいかという考え方であるが、これが明確でない学生もまた増加傾向にある。インターンシップに参加する学生にしても、アルバイト程度の意識しかもっていない者が多く見受けられるのが現状となっている。ゆえに学生には、就職活動時において、内定を受けた時からスタート・ダッシュするという意識をもつこと、それらを明確に相手に伝えることができる発信能力を培うこと、さらに技術系であれば最先端の技術に触れておくことなどが切に望まれる。

セッション2・3…分科会

3つの講演を踏まえた上で参加者全員が4つの分科会に分れて討議したが、各分科会の主題は下記の通り。

講演1分科会…慶應義塾大学の業務改革の現状を参考にしながら、大学改革の方向性を探る。

講演2分科会…小日向氏を中心に、時間の関係で割愛された講演内容を補いながら、大学運営のあり方を検討する。

講演3分科会…企業が求める人材と大学教育を対比させながら、人材育成における大学の役割を模索する。

総合分科会…講演内容とは直接関連付けずに、自由に意見交換し、個々の大学がかかえる問題点等について話し合う。

セッション4…総括

簡単に各分科会の討議内容が報告されたが、概要は下記の通り。

講演1分科会…業務の効率化・顧客サービス・職員の満足等を柱とした慶應義塾大学の業務改革の現状報告を受けて大学改革の方向性を話し合ったが、国立の一部で職員主導の大学が出てきているところからしても、事務側のリーダー・シップや教員と職員の連携が極めて重要になってきていることが、改めて確認された。

講演2分科会…補足講演のような形で始まり、やはり職員と教員の関係が話題となる。今や社会的な存在となった大学職員の運営への積極的な参画が望まれる一方、そのためには職員個々が実力によって信頼される存在になるべく努力する必要がある点等の提言もあった。

講演3分科会…企業が求める人材と大学教育の対比においては、単に企業が求める人材を大学が育成することでいいのかという疑問も投げかけられた。また、履歴書の書き方の指導等に傾注してしまった大学の就職指導については、高学歴になり他で教えなくなってしまった現状からしても、職員と学生の接点という位置付けからしても、重要なことなのではないかとの指摘があった。

総合分科会…情報交換が主だったが、大きくコスト意識・大学におけるセクハラ対策・情報活用・情報公開・人事考課・職員教育・ボトムアップ型システムの7点について話し合われた。

◎15日（木）12時15分閉会の辞をもって解散

第3回土曜セミナー 地球環境を考える

'99年9月11日

【テーマと講師】

1. 大気環境
　東京工業大学教授　市村禎二郎
2. ダイオキシンと環境ホルモン
　横浜市立大学教授　井口泰泉

【参加状況】29名(学生12名・社会人17名)

東京薬科(5)、東京工業(4)、千葉・横浜市立・明治(1)、社会人（17）

第18回大学教員研修プログラム 授業をどうする ―あなたは学生に何を伝えたいか―

'99年9月18～19日

【テーマと講師】

A. 学生を興奮に巻き込む授業を目指して
　北陸先端科学技術大学院大学学長　示村悦二郎
B. 学生に学んで授業を創る
　立教大学教授　佐々木一也
C. 学生の「わかりたい」を援助する授業
　東海大学医療技術短期大学助教授　堀　喜久子
D. "strategy"を考えさせる授業―どうすれば英語が読める？　英語が話せる？―
　玉川大学教授　佐藤久美子

【参加状況】60校72名（男60名・女12名）

日本(8)、東海(4)、北海道教育・大阪・大分・東京電機(3)、和歌山・徳島・福岡・大妻女子・松山(2)、宮城教育・東京医科歯科・東京外国語・東京商船・お茶の水女子・電気通信・金沢・香川医科・鹿児島・大阪府立・大阪市立・足利工業・聖徳・北里・東京理科・武蔵工業・聖マリアンナ医科・静岡理工科・愛知淑徳・豊田工業・名古屋外国語・日本福祉・京都学園・大阪工業・帝塚山・高野山・岡山理科・広島国際・山口東京理科・産業医科・福岡歯科・長崎総合科学・金蘭短期・山陽学園短期(1)、防衛大学校(3)、その他(1)

平成11年度
第3回大学教員研修プログラム委員会
'99年9月19日／大学セミナー・ハウス

【出席者】絹川正吉、井下　理、小林志郎、佐々木一也、建部正義、中田良平、宮腰　賢、山内正平、丹羽　泉、清水一彦、安岡高志
【ハウス側】企画室スタッフ2名
●主な議事
第19回大学教員研修プログラムの企画について、他

平成11年度
第2回大学職員研修プログラム委員会
'99年9月30日／アルカディア市ヶ谷

【出席者】田邊久夫、佐藤善志、松本由紀子、佐々木勝洋、新地章倫、吉田久治、岸本　誠
【ハウス側】佐野博敏館長、企画室スタッフ3名
●主な議事
第1回大学職員研修プログラムの実施報告、第2回大学職員研修プログラムの準備、他

寄贈図書

'99年7～9月

『国際文化交流の政治経済学』　早稲田大学　平野健一郎殿
『高等教育研究叢書』『大学論集　No.29』　広島大学殿
『「余韻」秀村欣二記念誌』　秀村千穂子殿
『こころの風景』　山梨学院大学　上野敦男殿

寄付

'99年7～9月

三〇、〇〇〇円＝慶應義塾大学名誉教授　森岡敬一郎殿
一〇、〇〇〇円＝大久保無教会集会　泉　治典殿
一〇、〇八三円＝二松学舎大学　呉ゼミ殿
脚立（大・小）、水撒きホース一式、物干し台2対＝北村邦夫殿

出版物のお知らせ

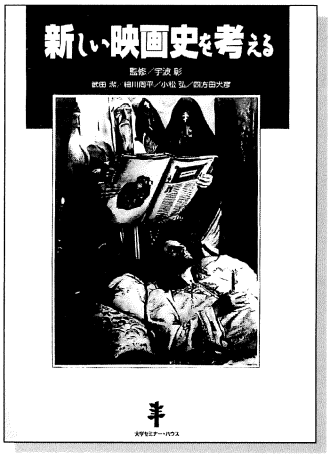
●お問い合わせ・ご注文は企画・広報係まで
TEL…0426―76―8532
FAX…0426―76―0266
E-mail…iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

大学改革を斬る

（大学設置基準の大綱化は何をもたらしたのか―白熱の議論12時間）
'97年12月発行　定価二、〇〇〇円（税込）

新しい映画史を考える

（第173回大学共同セミナー記録）
'98年12月発行　定価一、五〇〇円（税込）



大学力を創る：FDハンドブック

（教員の能力開発のための具体的な指針を満載）
'99年3月発行　定価二、五〇〇円（税込）
ハウス販売価格二、〇〇〇円（税込）

第35回大学教員懇談会記録

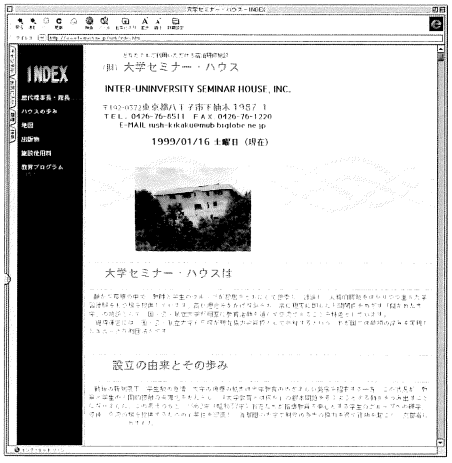
混迷する社会の中の教育と大学―大学の役割―
'99年7月発行　定価一、〇〇〇円（税込）

第16回大学教員研修プログラム記録

よりよい大学教育の方法を求めて
教える授業から学ぶ授業へ―その2―
'99年9月発行　定価七〇〇円（税込）

ホームページをご覧下さい

大学セミナー・ハウスでもインターネットのホームページを開設しております。主な内容は、ハウスの歩み、交通案内図、出版物、施設使用料、教育プログラムの開催予告などで、常に最新の情報をお届けする一方、ご意見やハウス主催のプログラムへの参加のお申し込みもいただけるようにいたしました。どうぞご覧下さい。
ホームページ…http://www.mesh.ne.jp/iush/
●お問い合わせは企画・広報係まで
TEL…0426―76―8532
FAX…0426―76―0266
E-mail…iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

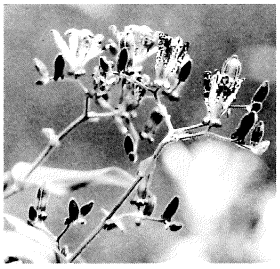


ひとこと

大学セミナー・ハウスが開館されてから今年で34年になりました。建物は古くなりましたが、環境は非常に良く、働く人の手入れにより構内・建物の管理が行きとどくよう努めております。
また、今年、（社）日本建築学会から、セミナー・ハウスの建物が「日本のモダン・ムーブメント20選」に選ばれました。紙面の都合で詳しくはお知らせできませんが、当該建物（環境）の歴史的価値が国際的に認められたことです。皆様のご来館を心よりお待ちしております。
伊藤政博

花ごよみ　セミナー・ハウス キャンパスの植物

ホトトギス



秋の訪れとともにひっそりと可憐な花を咲かせるホトトギスは、本館付近で見ることができます。小ぶりながらも、開いた花の形はユリに似ています。花には紫色の斑点がたくさんあり、それが鳥のホトトギスの腹の模様に似ているのが名前のついた由来だと言われています。10月下旬から11月上旬が見ごろです。
ハウスにはこの他、より原種に近いヤマジノホトトギスも自生しており、夏に素朴な花が見られます。

私の国際交流

八王子とケムニッツの市民オーケストラによる国際交流

—緑の中の充実した10日間を振り返って—

八王子・日独交流演奏会実行委員会事務局長
立川冨美代

16時間もかけて旧東ドイツからやってきた45名のケムニッツ・オーケストラの人たちが大学セミナー・ハウスに旅装を解いたのは、8月27日の午後7時でした。

振り返れば2年前、八王子フィルの後援会幹部が「八王子の町を巻き込んで、国際交流の演奏会をやろう」と言い出しました。それなりの手かずをふんで準備をして来ました。このような計画と実行にあたっては大学セミナー・ハウスを宿舎に出来ないものか、1年前からセミナー・ハウス食堂社長の酢屋様に相談をかけました。

まず、45名もの大人数のドイツ人であり、食事の問題もありますが、なにより楽器の練習の出来る場所が大問題でした。旧東ドイツなので割合質素に暮らしていますが、訪問したおりに驚いたのはみなさん立派な家に住んでいましたので、大学生のための宿舎で満足してもらえるかということも心配でした。

諸々の準備も終わり、10泊してその間に八王子フィルとの合同練習や、市内観光、富士山、東京湾ベイエリア等の見学等数々のプログラムを組みました。でも生活のベースはセミナー・ハウスです。1日目にそれぞれの部屋の使い方、食事の仕方、風呂特に日本式の風呂の使い方も気をつかいました。

ところが全然心配したことなく、食堂の開く時間には殆ど集まってきました。食べ方も日本人でも45人もいればそれぞれですので、食べても食べなくてもほっておきました。面白いことに、漬物それも何でもご飯にのせて食べていたのには驚きでした。朝7時のシャワータイムになると口笛を吹き吹き階段を降りてきます。洗濯をして階段の手摺に女の子のパンツが干してあるのにはびっくりしましたが、すぐ乾くので合理的ですよね。

夜の時間は彼等にとって本当に天国であったようです。ケムニッツは日本の緯度からしますと、樺太より北になりますので、8月でも夜は寒くて外で団欒などは夢のようだそうです。緑濃い木立ちの中、星を見ながらの夜な夜なのパーティは本当に楽しかったでしょう。

事務局長の立川さん(写真中央)、コンサート・マスターのセバスティアン・ベルトンさん(右)、通訳ボランティアの池上菜穂子さん(左)

何しろ彼等のエネルギッシュなことは驚くばかりで、1日の行事を十二分にこなした後、ビールを飲んでしゃべり、歌い、踊り、本当に日本人にないものを見ました。ご近所からクレームがないかと思いましたが・・・。私も一緒に泊まっておりましたが、1度も夜中にトラブルもなく一緒に楽しみました。と言いましてもドイツ語は全然わかりません。

簡単な英語、日本語、手振りと結構通じるものがありました。トランペットのGさん、毎晩私を暗がりの手摺に呼び、「聞いてご覧、たくさんの動物の声がする！　ケムニッツも八王子も同じ声だよ、でも八王子のほうがたくさんいる！」セミナー・ハウスの蝉は夜中まで鳴いていますし、ケムニッツの蝉はとても小さいのだそうです。

子供たちをご主人に預けてきた団員も多く、毎晩電話ボックスの前は行列で、7才の息子が電話の向こうで泣いたのと自分も泣いて、でも日本にこられたのは本当にラッキーと言っている若いママもいましたが、ステージでは真剣な顔でヴァイオリンを弾いていました。彼女は息子のためにCDカセットを買って嬉しそうにみせてくれました。国は違っても親の気持ちは同じですね。

10日間も同じ釜の飯を食べて、すこし民族気質のようなものを見ることが出来ました。自己主張の強いこと、ぐんぐん押してきて、少しでも引くとかさにかかって主張します。そして中々相手の言い分を聞こうとしません。そして買うものと頂くものとを厳しく仕分けています。お金を出すのであれば自分が欲しくなければ、どのような事情でもはっきりNOですが、下さるものはマッチ一つでも自分はまだもらってないとうるさく言ってきます。日本人にかけている部分ではないかと感じました。

コンサート直前まで真剣な練習が夜遅くまで続けられた—大学院セミナー館にて

セミナー・ハウスのご理解とご協力とがなければ今回のこの事業がこんなにスムースに、何の問題もなく、彼等が十分に楽しんで過ごせなかったでしょう。彼等にとって演奏会もきっと思い出深いものであろうと思いますが、何よりも緑の中の10日間が「八王子」の全てではないかと思います。全てが終わって3週間ぶりにセミナー・ハウスを訪ねました。緑の木々から漏れる日の光がすっかり秋になっていました。手摺にもたれて遠いケムニッツで今頃彼等は何をしているか想いをはせました。あの忙しい日々がなつかしく、私にとりましても生涯の大きな出来事の一つになりました。でもまたきっと新しい夢を膨らませるでしょう。

わたしたちの合宿

8時間くらいのペースにしませんか？

埼玉大学教養学部3年　河野　明

この3日間のゼミ合宿で、僕たちはたくさんのことを学んだ。人間がんばれば、いちんち11時間の勉強スケジュールだって飲酒抜きで乗り切れるってことや、文献の書きかたはすごく難しいってこと。でもやっぱり、僕らの福岡先生がとってもすごい先生なんだってこと、これが一番だ。

前々からいろいろと先生の伝説はあったんだ。結婚後の姓を、奥さんとじゃんけんで決めようとしたとか、公演の時には観客を笑わすことしか考えてないとか、いろいろ。そしてもちろん、今回も先生は見せてくれた。

日独交流演奏会のために、ちょうど渡日してセミナー・ハウスに泊まってたドイツの人たちに、留学生の英語を通訳に、先生はこうスピーチしたんだ。「僕はこのセミナー・ハウスを15年間使っていますが、夕食にコーヒーとケーキが出たのは今日が初めてです。みなさんに出会えたことを、僕はとても感謝しています！」やってくれたぜ、先生。ドイツ人を一発吹かしてやるなんて！　ナチスジョークも真っ青だ！っていうか、なんでもアリだ。

学生のレポートの中身だって、長野五輪から大学改革からアルコール中毒の更正施設から笑いの研究までやっぱなんでもアリ。ありがとう先生、先生のおかげで、千字くらいじゃとても書ききれないたくさんの思い出ができたよ。先生がいる埼玉大学教養学部現代社会学コース（次年度受験希望者募集中）に入れて、とってもよかった。

だから先生、せめて来年からはいちんち8時間くらいのペースにしませんか？やっぱダメっすかね？　なんてね！　マジです！　あとケーキおいしかったです！　来年もよろしくお願いします！

厳しい指導の中にも楽しい雰囲気が漂う福岡ゼミの皆さん。写真後列中央が福岡安則教授―本館ラウンジにて

利用状況

'99年7月～9月
＊＝同月2回利用
日帰り利用はグループ数のみ
（延べ人数には日帰り利用者は含まず）

■7月（47グループ、延一、五九四人）

東京都立大学教授　南雲　智
明治学院大学教授　四方田犬彦
東京大学教授　島薗　進
一橋大学教授　伊豫谷登士翁
東京学芸大学おこりんぼ
中央大学教授　細野　助博
立教大学教授　小西　正捷
東京大学教授　相田　卓三
千葉大学教授　菅原　憲二
早稲田大学教授　木棚　照一
成蹊大学教授　宇野　重昭
日本大学歯学部奇術部
東京都立大学教授　小林　賢次
東京大学教授　北岡　伸一
学習院大学教授　坂本孝治郎
早稲田大学教授　木村　建一
杏林大学教授　滝本　道生
慶應義塾大学手話サークルMiMi
中央大学音楽研究会混声合唱部
中央大学教授　今　圓子
アイセック東京大学委員会
目黒星美学園小学校教員研修
朝霞高等学校＊
産能大学教授　根来　龍之
山梨学院大学教授　布川　玲子
フェリス女学院大学教授　山之内　靖
第180回大学共同セミナー
第36回大学教員懇談会
第1回大学職員研修プログラム
ポリヴァレントゼミ
首都圏ファンタジー・グループ研究会
郡内研究会
現代と経済
日本建築家協会関東甲信越支部
地球市民アカデミア
朝日カルチャーセンター・横浜
文学教育研究者集団
信頼性設計技術ワークショップ
八王子市教育委員会
東京都小学校生活科教育研究会
航空宇宙技術研究所囲碁部
システム・アナライズ・コーポレーション
日立製作所
〈個人利用〉
北九州ＹＭＣＡ　荒川　裕子
〈日帰り利用〉
野猿峠シルバークラブ
日本基督教団八王子めじろ台伝道所

■8月（67グループ、延五、三四八人）

東京工業高等専門学校大韓民国政府派遣専門大学生研修
東京大学講師　川人　博
お茶の水女子大学ギター部
芝浦工業大学建築学科
一橋大学保健管理センター
中央大学学生相談室
明治学院大学教授　大西　晴樹
立教大学文学部集中合同講義1
東京大学学生会館委員会
東京理科大学大沢ゼミ
東京学芸大学英語プレゼンテーション合宿
学習院大学教授　高橋　利宏
一橋大学天体観測
専修大学日韓研究会
明星大学通信教育部
駒澤大学教授　寺中　良二
中央大学講師　木下　徳明

中央大学通信教育部
東京理科大学Ⅱ部物理学研究部
法政大学諏訪ゼミナール
東京学芸大学陸上競技部短距離ブロック
早稲田大学太極拳クラブ
千葉大学教授　嶋津　格
常磐大学教授　伊田　政司
青山学院中等部ハンドベル部
東京都立青梅東高等学校
神奈川県立相模大野高等学校演劇部
東京国際大学講師　仲島　陽一
佼成学園高等学校数学研究同好会
フェリス女学院大学室内管弦楽団
江戸川大学講師　平山　満紀
同志社国際高等学校アメリカンフットボール部
東洋大学宗教社会学ゼミ
東京都立代々木高等学校生徒会
東京神学大学公開夜間神学講座
晃華学園中学・高等学校英語部
昭和大学医療短期大学助教授　福井　勉
東京大学教育学部附属中学・高等学校
産能大学助教授　玉木　彰
数論セミナー
日本平和学会平和研究セミナー
言語研究会
アレキサンダー・コネクション
モラロジー研究所
村田セミナー夏期懇談会
狛江市教育委員会
保谷市教育委員会
南大沢フットボールクラブ
文学教育研究者集団
山王教育研究所
相模原キリスト教会
ＡＩＴＣ
国分寺高木町バプテスト教会
大久保無教会集会
東京都多摩教育事務所西多摩支所
アジア・カルヴァン学会
磁気共鳴分光学の物性化学への応用
八王子ぞうれっしゃ合唱団
ＦＯＲＵＭ寺子屋
昭島市教育委員会
望月集研究会
第37回炭素材料夏期セミナー
八南作文の会
高木学校
かかわりの発達と歪み研究会
国際商事法研究所
アサーティブジャパン

■9月（88グループ、延二、七九七人）

埼玉大学教授　山口　和孝
中央大学教授　清水　克洋
高千穂商科大学ゼミナール連合会
明治学院大学教授　中山　弘正
埼玉大学教授　福岡　安則
東京工芸大学助教授　久米祐一郎
法政大学教授　牧野　英二
杏林大学中国歌劇団
大妻女子大学教授　大野　清志
法政大学集中体育授業
帝京大学講師　鷲尾　善典
日本女子大学助教授　坂田　仰
東京外国語大学教授　中野　敏夫
日本大学通信教育部まつり実行委員会
成蹊大学教授　上田　徹
武蔵大学講師　杉井　純一
恵泉女学園大学助教授　川島　堅二
明治大学講師　田中　友章
学習院大学教授　新川　哲雄
法政大学教授　上林千恵子
一橋大学教授　佐久間昭光
明治学院大学教授　西阪　仰
明星大学教授　塚田　紘一
中央大学教授　西海　真樹
立教大学教授　青木　康
法政大学教授　相田　利雄
桜美林大学講師　奥野　克巳
中央大学教授　宇佐美　毅
立教大学教授　上田　信
日本大学教授　田中麻紗巳
東京都立大学助教授　大塚　和夫
大妻女子大学教授　氏家　春生
高千穂商科大学教授　横地　房彦
杏林大学教授　日笠　完治
立教大学教授　田中　治彦
中央大学日本国際連合学生連盟
明治大学教授　播　里枝
明治大学教授　牧野　誠一
千葉商科大学フレッシュマンキャンプ
一橋大学教授　村田　光二
東京都立科学技術大学アンサンブル
慶應義塾大学助教授　吉川　肇子
明治学院大学助教授　竹中　千春
東京大学助教授　石田　勇治
明治大学教授　飯田　和人
日本大学教授　秋山　和宏
千葉大学薬学部茶道部
早稲田大学講師　清水　和己
日本大学通信教育部東洋史研究会
東京大学助教授　松原　宏
埼玉大学講師　江口　幸治
福井工業大学教授　芳野　赳夫
秀明大学助教授　山口　桂子
東京商科学院専門学校
駿河台大学助教授　渡辺　裕子
二松学舎大学教授　呉　英元
和光大学教授　山村　睦夫
都留文科大学教授　千葉　立也
獨協大学教授　大竹　孝司
獨協大学教授　山田　玲子
亜細亜大学助教授　植村　利男
淑徳大学教授　足立　叡
山梨学院大学スポーツセンター研修会
敬和学園大学講師　福王　守
関東近世史研究会
方法論懇話会
哲学研究会
全国大学生協議会
イスラーム地域研究プロジェクト2C
第18回大学教員研修プログラム
ヘルスカウンセリング学会・トロイメライ
八王子・日独交流演奏会実行委員会
東京都教職員組合渋谷支部
エサレンボディマインド
インド考古研究会
日本コンチネンス協会首都圏支部
アトピッ子地球の子ネットワーク
国際航業
日本キャンパス・クルセード・フォー・クライスト
システム・アナライズ・コーポレーション
姿勢と歩行勉強会
新建築家技術者集団東京支部
明工商事
鉄道総研コーラスグループ
〈個人利用〉
名古屋外国語大学　新谷沙緒里
東京大学　吉野　雄介
東京都立大学　小西　公大
〈日帰り利用〉
第3回土曜セミナー

1999年（平成11年）度・主催プログラム開催予定

■大学共同セミナー・大学院共同セミナー

回　数	期　間	主　題	講　師
第181回	1999年12月10～12日（２泊３日）	フィールドワークの魔力 —その愉しみと苦しみ—	佐藤郁哉、園田茂人、山本真鳥、山中速人
第182回	1999年12月17～19日（２泊３日）	地球市民になろうpart3 —「暴力の文化」を「平和の文化」へ—	天川恵美子、岩田昌征、古沢希代子、臼井久和、首藤もと子、松本孚、杉田明宏

■国際学生セミナー

第26回	1999年11月19～21日（２泊３日）	21世紀の世界秩序をどう創っていくか？—パワー・マネー・エシックス	波多野敬雄、石見　徹、金子　譲、茅原郁生、ロナルド・モース、宇佐美　滋、大芝　亮、勝俣　誠、滝田賢治、山本吉宣、渡邊啓貴

■大学教員研修（FD）プログラム

第19回	2000年1月22～23日（１泊２日）	どうする「厳格な成績評価」	阿部美哉、阿部和厚、桐原保法、濱名　篤、田中義郎

■土曜セミナー

第５回	1999年11月27日	視覚芸術とイリュージョン	藤枝晃雄、谷川　渥、小松　弘
第６回	1999年12月４日	「すばる」でどこまで宇宙が見えてくるか	唐牛　宏、岡村定矩

お問い合わせ・お申し込みは企画・広報係まで　ＴＥＬ…０４２６—７６—８５３２
ＦＡＸ…０４２６—７６—０２６６
E-mail　iush-kikaku@mub.biglobe.ne.jp

■その他

第１回炭やき教室	1999年12月17～19日	炭やきは楽しい	岸本定吉、高橋哲夫、広若　剛
第２回 ワイン・アカデミー	1999年11月20	楽しい味わい方	福田一郎、河野純一

お問い合わせ・お申し込みはフロントまで　ＴＥＬ…０４２６—７６—８５１１
ＦＡＸ…０４２６—７６—１２２０

※来年度のプログラム開催については、決定し次第ご案内させていただきます。

●●館長室から●●

大学セミナー・ハウスは多摩のこの地域に多い起伏に富んだ環境にある。緑も多く木々も繁茂している。

この夏の熱帯性低気圧による突然の集中豪雨は、河原などで自然を愛する家族ぐるみのキャンパーを犠牲にするなど悲惨な災害をもたらしたが、自然は恵みだけを授けるものではないことを思い知らせてくれた。

この集中豪雨は、セミナー・ハウスにも創立以来の災害を与えた。建築物や施設は無事であったが、山裾が崩落したのである。崩れた土砂と樹木の一部は隣接するゴルフ場にまで流れ込んだ。敷地を通る私道の脇も崩れ、いくつかの杉の古木が送電線に倒れかかった。

直ちに応急処置を講じたのは勿論であるが、創立以来自然の恩恵だけを信じ治山治水が忘れられていたことを思い知らされた。この辺りの地勢は、数米の関東ローム層の下は粘土層で、樹木の根もこの粘土層には伸びてはくれないで柔らかいローム層だけを掴むものらしい。平素はこの表層に保持される雨水が、今回はその限界を超えて樹木もろとも崩落させたのである。

有り難いことに、私道脇の方の崩落や樹木の伐採は、この道路を利用される市や自治会の方々の善意とご尽力で復旧させて戴けた。しかし、本格的な治山・治水となると莫大な予算が必要である。今やセミナー・ハウスは文字通り未曾有の崖っぷちに立たされることになった。

秋の陽光に映える紅葉の美しさも厳しい季節の到来を予感させるのである。

表紙の写真＝第３回土曜セミナー（９月11日）の集合写真・第４回土曜セミナー（10月９日）の講義風景

セミナー・ハウス
1999年7・8・9月分（年4回）
第156号
定価：200円
発行＝財団法人　大学セミナー・ハウス　発行人＝佐野　博敏
〒192-0372　東京都八王子市下柚木1987-1　編集＝大学セミナー・ハウス企画・広報係
TEL　0426-76-8511　FAX　0426-76-1220　制作＝中山企画
SEMINAR　HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.156　(July～September, 1999)